

ピン大学への留学を決心したようです。

るつ記記念基金記念礼拝
(2012年11月18日)

み言葉に聞く

マタイによる福音書 13章 1節~9節



小林 毅
(チャイルド・ファンド・
ジャパン 事務局長)



今日、私たちは、るつ記記念基金記念礼拝を守っています。この基金は、「アジアの貧しい人々と共に歩みたい」という藤崎るつ記さんの志を受け継ぐことを目的として設立されました。藤崎るつ記さんは、1983年4月2日土曜日、フィリピン共和国サンバレス州ボトランの海で帰らぬ人となりました。当時、私はフィリピン大学大学院の社会福祉修士課程に在籍しており、修士論文の仕上げに悪戦苦闘していました。また、Child Fund Japanの前身であるCCWA(シーシーワ)と呼ばれていた社会福祉法人基督教児童福祉会・国際精神里親運動部でフィリピン駐在員として働き始めた時でした。

るつ記さんと私は、共に日本ルーテル神学大学(現在のルーテル学院大学)で社会福祉を学びました。るつ記さんは二年後輩です。私は、1980年3月に大学を卒業、大学の恩師である大谷嘉朗先生の助力を得て、その年の6月からフィリピン大学に留学しました。るつ記さんは、大学生一年生の時、CCWAが支援していたサンバレス州ボトランで行ったワークキャンプに参加、三年生の時にはインドやバングラデシュでボランティアをして、「アジアの貧しい人々と共に歩みたい」という思いを強めていきました。この志をどのように実現したら良いか、大谷先生に相談する中で、私も学んでいたフィリ



るつ記さんは、1982年3月に大学を卒業、その年の8月からフィリピンの語学学校で英語の特訓を受け始めました。そして、生活にも慣れた11月から(これは2学期の始まる月)、大学で授業を聴講することも始めました。翌1983年の3月末には、語学学校での学びが一区切りを迎え、大学も2学期が終了しました。1983年のイースターは4月3日でした。国民の多くがカトリック信者であるフィリピンでは、受難週はお休みとなります。6月から始まる本格的な大学院での生活を前に、少しでも現場を知ろうと、受難週のお休みも利用して、るつ記さんは、3月24日から、かつてワークキャンプで訪ねたボトランでボランティアをしました。

ボランティア活動も終盤に差しかった4月2日、間もなくマニラに戻り、そして日本に一時帰国するるつ記さんのため、ボトランで親しくなった人たちが海岸で送別会を行ってくれました。その会の後、7、8人で海岸の浅瀬で水遊びを始めてしばらくして、悲しい事故が起きました。

事故の知らせは、翌4月3日、イースターの早朝、るつ記さんが寮住まいしていた聖アンデレ神学校の教師からの電話で知らされました。と同時に、教師から、家族と日本大使館の関係者への連絡、さらにその後の再度の電話で、日本大使館のアドバイスに従い監察医による検視などの手続きをボトランで終えた上でるつ記さんをマニラに搬送するため、同行するよう求められました。

そのため、私はボトランを訪ね、一緒にいた関係者から、直接話しを聞くことができました。事故の始まりは、浅瀬で一緒に遊んでいる最中に、二人が深みにはまり、溺れたのです。溺れなかった人は慌てて岸へ引き返し、助けを呼んだそうですが、日立で育ち、泳ぎが得意だったるつ記さんは、溺れた人を何とか助けたい一心で、「スイ



ム、スイム：こうやって泳ぐの！」と言いながら、溺れた人の傍らにいつづけたそうです。そして、その後、溺れた人にしがみつかれ、るつ記さん自身も溺れてしまいました。まもなく、三人は漁師たちに上げられました。一人は海岸で意識を戻し、病院に搬送された一人も命を取りとめたものの、るつ記さんは息を吹き返すことがありませんでした。

溺れた人の命を助けて、自らは命を落とすというるつ記さんの死について、新聞記者から取材をされました。記者のひとりからは、感動的なストーリーにするためでしょうか、るつ記さんは溺れた友を助けようと自らの身を差し出したのですねと確認を求められました。直接話しを聞いた私は、そこまで彼女の意志を確認することはできませんでした。しかし、確かなことは、るつ記さんは溺れている人に近づき、助けようと傍らにいつづけたということです。苦しみを経験している人に近づき、寄り添ったのです。

今日は、イエス様がお話しになった「種を蒔く人」のたとえを読みました。9節に「耳のある者は聞きなさい」とありますが、最後の最後まで苦しむ人と共に在り、そのことのゆえに自ら命を落としたるつ記さんは、確かに御言葉に聞き、御言葉に生かされ、その生を全うした人だと言えます。

るつ記さんの死は、藤崎信先生や一枝先生はじめたくさんの皆様に大きな悲しみ

を与えました。それと同時に、その死を無駄にしないため、「アジアの貧しい人々と共に歩みたい」という彼女の志の実現に向けて何かをしないといけないという強い思いが皆様の間に芽生え、その思いは、「るつ記記念基金」として実を結びました。これまでに、88人のフィリピン子どもたちが教育を受け、成長しています。るつ記さんの死は、大きな、本当に大きな悲しみをたくさんの人たちにもたらしました。しかし、その死は、私たちを含めて多くの人たちがアジアに目を向け、貧しい人々と共に歩む活動へ携わるきっかけともなりました。今では、聖書が言うように、「ほかの種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった」ということが起こっています。今日、私たちが守る礼拝は、るつ記さんを覚えると共に、この基金の働きを起こし、その働きを導き、豊かに実を結んでくださった神様の恵みを覚え、感謝する礼拝でもあるのです。

Ω



るつ記記念基金記念礼拝（2012年11月18日）



日立教会ホームページより

ほかの種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった